

I Can Hear His Voice from the World of Richard Wright — *Black Boy* (American Hunger) —

92E107 市川 亮子

They meet with darkness in the daytime
And they grope at noonday as the night…

— Job

彼らは昼も夜も暗黒に遇い
まひるにも夜の如く模り惑わん

— ヨブ記 —

「黒人に興味を持ったことはありますか？」

私は、高校3年生の地理の授業の時に、初めて黒人の世界に触れた。それまでの私は、「黒人」と聞くと、恐怖と犯罪といったイメージを持っていた。同時に、差別や迫害を受けているかわいそうな存在の人種だという、同情のような感情をも持っていた。この時の私はまだ気がついていなかったが、自分の存在というものを、黒人よりも上のものという意識を持ち、知らぬ間に差別の世界に入り込んでいた。そして、差別という行為が生み出す悲しみや、残酷さを知るよしもなかった。しかし、私の考えを変えたものがあった。それは、教材として使われた、アレックス・ヘーリー作品の *Roots* であった。この作品を見て、私は、何か大きなものを見つけ、大いに影響を受けた。内容は、クンタ・キンテ (Kunta Kinte) というある少年が、アフリカで奴隷狩りに会い、アメリカへ連れてこられ、その少年の一族が、奴隷制度を経て、南北戦争を乗り越え、最終的に黒人自らの土地を彼ら自身の手で手に入れる、というものであった。この作品で、黒人という人種が、逆境の中へ追い込まれ苦しい生活を余儀なくされ、苦しみ抜いてきたということを充分に見せつけられた。これに続いて今度は、マーチン・ルーサー・キング牧師による、“黒人の自由への歩み” というものを学んだ。1963年8月28日に、奴隷解放宣言100周年を記念して行なわれた「ワシントン大行進」(“I Have a Dream”) の最終演説の一説にこのようなものがあった。

「そして、私たちが自由の鐘を鳴らせば、そう、村という村、集落という集落から、また、州という州、町という町から自由の鐘を鳴らせば、その時には、黒人も白人も、ユダヤ人も異教徒も、プロテスタントもカトリックも、全ての神の子達が手に手を取って、『ついに自由になった！ ついに自由になった！ 全能の神に感謝すべきかな。私たちはついに自由になった！』という、あの古い黒人霊歌を口ずさむことができるであろう。」

(When we allow freedom to ring, when we let it ring from every city, we will be able to speed up that day when all of God's children, black men and white men, Jews and Gentiles, Protestants and Catholics, will be able

to join hands and sing in the words of the old Negro spiritual, "Free at last! Free at last! Thank God Almighty, we are free at last!")

私は心が縛られでもしたかのような気持ちになった。そして、人間の強さ、弱さ、醜さ、ずるさを短時間にしていたき込まれ、人間の嫌な部分を見せつけられた。

このようなことから、私は、黒人が、抑圧の中でどのような黒人独自の世界を作り上げ、自由を手に入れようという努力をしてきたのか、ということに興味を持ち、中でもアメリカ社会に大きな影響を与えたといわれるリチャード・ライトの世界に足を踏み入れてみようと思った。彼の世界の中から黒人自身の声を聞いてみようと思い、自伝的要素が含まれているといわれる『ブラック・ボーイ』を取り上げて見たのである。『ブラック・ボーイ』という作品を、彼の人生内容として伝えたいと思う。

彼、リチャード・ライトは、アメリカ文化を永久に変え、黒人文学の王者ともいわれている。彼は、52年という短い生涯を、生まれながらにして黒人という悲運を負わされ、それと闘いながら、幾つもの紆余曲折を経て、波乱の多い人生を送った。

彼は、ミシシッピ州のナッチェズという村の農場に、貧しい黒人農夫を父として生まれた。彼の父親は、彼が5歳の時に、妻子を捨て、家を出てしまい、その後の暮らしは、母親の細腕一つで支えられていた。しかし、その日の食物にも欠くような貧困のどん底に突き落とされた生活を強いられて行き、ついには、頼りの母までもが脳卒中で倒れ再起不能となってしまう。やむなくライト一家は、離れ離れになり、彼は、親戚の間を転々としながら育てられた。15歳で小学校教育を終え、その後すぐに世の中に放り出された。彼の放り出された世の中は、黒人を人間として認めるということを徹底的に拒否する南部社会であった。彼はこの社会の中で黒人として生きるために、知るべきことを嫌というほど知った。人生とは、耐えるものであり自由ではない、いかなる議論も、否定することも許されないという真実、自分一人だけの世界観、どのような教育によっても変えることのできない人生観というものを、彼は学んでいった。それと同時に、黒人は西欧文明の中では確かに生きている、しかし、これは果たして純粋で積極的な優しさとか、純潔とか、愛とか、名誉とか、誠実とか、記憶力とかというものが、生まれた時からのものでありうるのかという、生きるということを否定でもしてしまうかのような疑問を彼は持つようになった。

彼の生きる道には、数々の壁が立ち塞がった。一つは、「恐怖」という感情であった。この感情は彼の感情生活の中での一部分となり、一つの教養というものになり、信条でもあり、宗教でもあった。彼は、白人による虐待というものをさほど経験したことはなかった。しかし彼は、「恐怖」という感情を暴力の中から見つけ出した。彼にとっての「恐怖」という感情は、白人から受けたのが始まりではなかった。親族からであったのだ。彼は、自らの中から、「恐怖」を作り上げてゆき、自然に警戒する術を急速に習得していった。

親族からの彼への暴力は、常に彼の疑問に対しての答えであった。ライトという少年は幼い頃からものをよく尋ねる性格であった。しかし、物事を理解するというのを許されていない黒人社会にとって、彼の存在は、誰にとってももうとうしいものであった。そのため、彼の疑問に対しての答えというものは暴力となり、殴るなどをして口をふさぐというものであったのだ。幼い頃に受けた衝撃的なものというのは、生涯にわたって大きな影響を与え続ける。彼はこの行為に対して、とても敏感になっていた。暴力という「恐怖」は、彼の中で緊張感として

ずつついて回るものとなり、これを彼は始終心に抱き、それと共に生き、ともに眠り、それを相手に闘う運命を持つことになったのだ。彼の心は、この運命に押しつぶされ、この運命に負けてしまうという結果を生んだ。そしてまた、この「恐怖」の中で、白人の持つ黒人に対する憎悪の中で、そして親族の暴力の中で、彼自身の生活は可能なものであり、この憎悪は、なぜ自分の前に存在するのであろうかという、新たな疑問を彼に抱かせてしまった。もう一つの壁は、この小説の副題ともなっているように、「飢え」というものであった。彼ら黒人にとって飢えや貧困というものは、一生つきまとわれるものであった。この残酷さを語ろうというのは、難しいものである。前記のように、その日その日の食事がどうなるかといったぎりぎりの生活の中にいたのである。人間という動物は、腹が満たされていないとなぜか意地が悪くなる。心の狭さや貧しさが隠し切れなくなってしまう。しかし、これは動物ならば自然な感情の動きである。黒人は、この自然な感情ですら、表現する事を許されていなかったのだ。

ライトにとって、空腹という感情はどうか押さえることのできるものであった。彼が耐えることのできなかった感情は、心の飢えであった。これも、彼にとって大きな壁の一つなのである。数々の転居を繰り返し、親族の中でたらい回しにされた彼は、愛情というものにとっても飢えていた。そして心の安らぎをも求めていた。しかし、母親は全身不随、親族の彼への風当たりは冷たく、まして愛情を白人社会の中で求めることなど、決して許されないものであった。そして、黒人社会の中にも、白人社会の中にも「あれは、だめ。これも、だめ」という抑圧が彼の世界をどんどん狭めて、どんどん飢えさせていったのである。その中で彼は、自然にこの飢えを満たす方法を見つけ出していったのである。彼の見つけた世界は、空想の世界であった。この世界は、彼が心の飢えを満たそうとすればするほど、どんどん膨れあがり彼に安らぎを与えていった。しかし、この、彼だけの世界に安住することですら、断ち切られてしまった。白人の手だけによってではなく、他の黒人、親族、家族にまでも……彼は孤独を感じた。そしてこのような言葉を残している。

「もし、僕が命を捨てれば世の中の苦しみが終わるといふなら、僕は命を捨てるよ。
しかし、どんな事をしたって、世の中の苦しみを終わらせることはできないと、僕は
思うんだ。」

彼は、彼の人生を身を持って生きて、見て、感じて、耐えてきた人生は、恐怖であり、不安であり、飢餓であり、戦慄であり、孤独であると感じている。彼は、彼の黒人としての人生を辛く、冷たく、悲しいものであったとしている。ものを考えたり、感じたりすること、これは無意味なものであり、権威と伝統の中で生きていくということしかない世の中の存在は、彼に大きな影を落とし、彼の置かれている環境を恐れ、怒り、憎んだりもした。

彼は、飢えに耐えることも、憎悪を浴びながら生きることも、どれもが黒人が避けて通ることのできない運命であるということを知っている。しかし、抱くことを許されない感情を持ちたい、そして、生命の息吹を感じたいといった感情が、彼の孤独の中で、他のどんなものにもまして、深く、苦しい心の傷として残っていったのである。

そして彼は、北部で生活する事を憧れることによって、彼の可能性を見つけ出そうとした。彼の孤独という感情をぬぐい去り、乗り越えるために、北部への憧れを募らせていったのである。

南部は、一個人の人間のほんの一断片しか受け入れることができない。その他の部分はすべて——人間の心と頭の、一番すぐれた、一番深い部分は——盲目な無知と憎悪のうちに打ちすてられて省みられないのである

白人は、黒人の存在を知っているという。しかし、南部の白人は、黒人を知ってはいない。そして、白人は黒人にも彼らの「場所」があるという。しかし、そのような「場所」は決して存在しなかった。ライトは、あったとされているその「場所」を、体内に潜む本能の命ずるままに拒否していったのである。これは、孤独への拒否反応であった。彼はこの孤独の中で、自分が、彼らの誰よりも劣っていると感じたことはなかった。

彼はこの『ブラック・ボーイ』を自由と、人間性の発見、いわば、自我形成の歴史を、もう一度、跡づけるために書いたのである。この作品の中には、同胞の悲惨さと、その悲惨さからくる人間性の欠如とを、自分も同じ状況にある人間として認めながらも認められず、ついには、同胞を捨て、自己完成と自由を求め、生きる道を求め19歳にして旅立ちを決意した、彼の孤独からの脱出、自由への憧憬が含まれている。そして自分の個性にしがみつかざるを得なかった、孤独で自尊心の強い男を明らかにしたのである。

私は、ライトの世界を、そして、黒人の世界を少し見る事ができた。これは、極わずかなものであったが、私という人間の存在を、認識するにはよい機会となった。彼の世界、黒人文学を学ぶには、まだまだ隠蔽されている汚い部分を見なければならぬ。そしてこれは、同じ人間として生きるものの避けて通ってはいけない世界であると、私は考える。

人間は、いろいろな面で闘いを余儀なくされた生き物である。しかし、闘うことによって誰かが傷つき、誰かが悲しみに突き落とされるのだ。恐怖や、緊張、不安といった感情は、自分を縛り付けてしまい、この感情に飲み込まれてしまったとき、人間の存在は無くなってしまわないだろうか。

彼は、白人社会の中で、多くのことを学んだ。この学びは、人間が生きるためには必要のないものである。なぜなら、生きるということは、本来自由であり、明るく、希望に満ち溢れている世界のことをいうからだ。ライトという人物が書いたこの物語は、彼ら黒人が生きていく上での、大きな道標となったであろう。

「あなたは、黒人を知っていますか？」

「あなたは、黒人に対してどのような印象を持っていますか？」

こんな質問を投げ掛けられた時、人間である自分を忘れてはいけない。自分は人間である。どこの世界にいても、人間は人間なのである。決して、同じ人間である彼ら黒人の存在を特別なものにしてはいけない。決して、否定をしてはならない。

私は、ライトの世界に、人間を感じる事ができた。人間の息吹を感じる事ができたのである。

(本稿は、1996年2月8日に行なわれた「卒業論文発表会」で発表したものに、多少の加筆をしたものである。)

参考文献

Wright, Richard. *Black Boy* (American Hunger) Harper Perennial, 1993.

リチャード・ライト『ブラック・ボーイ』—ある小年期の記録—上・下。野島孝訳、岩波文庫、
1967年

高橋正雄『悲劇の遍歴者—リチャード・ライト論』中央大学出版部、1968年。

リチャード・ライト『アメリカの息子』1・2巻、黒人文学全集第2巻、橋本福夫訳、早川書房、
1968年

Haley, Alex. *Roots* (The Saga of American Family) Doubleday, 1974.

(卒論指導教員 北嶋藤郷)